

氏 名	鈴 木 孝 司 すず き たか し
学 位 の 種 類	医 学 博 士
学 位 記 番 号	論 医 博 第 339 号
学位授与の日付	昭 和 42 年 3 月 23 日
学位授与の要件	学 位 規 則 第 5 条 第 2 項 該 当
学 位 論 文 題 目	イヌの頸部—胸部血管系に関する研究

論文調査委員 (主 査) 教 授 堀井五十雄 教 授 西村秀雄 教 授 岡本道雄

論 文 内 容 の 要 旨

イヌの頸部—胸部全体にわたり筋と血管の相互関係を考慮して行なった研究は少なく、したがって参考となる図版に乏しい。そこで頸部—胸部全体の血管系を確立するために、注入標本を用いて、筋と血管の相互関係を考慮して、血管の起始、走行、分布状態を研究し、これらの図版を完成させ、従来不備であった血管系を確立した。また血管名は諸家により異なるものがあるので、PNA を考慮して適当と思われるものを使用した。

A. イヌの胸壁血管系に関する研究

I 外側内胸動脈。この動脈はヒトでは異常血管として報告されているが、イヌでは常在の血管であることを発見した。起始は一般に肋頸動脈でヒトと少し異なるが変異の範囲内と考えられる。また分布区域も第1ないし第3肋間隙で、ヒトよりもせまいが、その位置、経過はよく一致するので、ヒトで用いられている「外側内胸動脈」と名づけた。

II 肋間動脈と外側内胸動脈。これらの動脈の起始、分布区域、共同幹形成、分岐部を観察した。第1肋間動脈は深頸動脈からおこる極めて小さい動脈である。最上肋間動脈は第2肋間動脈だけをだす場合と第2および第3肋間動脈の2本をだす場合があり、後者がやや多い。これらを左右相互関係から5型に分類した。なお第3肋間動脈はほぼ半数が胸大動脈からおこる。外側内胸動脈は肋頸動脈のほか深頸動脈や頸横動脈からも少数おこり、第1ないし第3肋間隙に分布する。分布区域の左右相互関係から7型に分類した。胸大動脈からおこる肋間動脈の共同幹形成は頭側の肋間動脈群に多く、尾側の肋間動脈群ではわずかにみられた。また左右を比較してみると右側にやや多い。異常例として左第2肋間動脈と右第4肋間動脈の共同幹形成がみられた。各肋間動脈の分岐部の高さを椎体を基準にして表わした。左右の関係では左側が右側より頭方にかたよる。

III 胸壁の諸筋に分布する血管、胸壁には鎖骨下動脈と腋窩動脈からおこる動脈群〔肋頸動脈（頸横動脈、深頸動脈、最上肋間動脈、外側内胸動脈）、肩甲頸動脈（このうちの胸—三角筋動脈）、前胸動脈、外

側胸動脈, 肩甲下動脈 (このうちの胸背動脈と肩甲回旋動脈)), 肋間動脈からおこる枝 (背側枝, 背外側皮枝 (新称), 外側皮枝), 内胸動脈からおこる枝 (貫通枝, 頭側腹壁動脈), 横隔腹壁動脈が分布するが, これらの血管の起始, 走行, 各筋に対する分布状態を Figg. 1~14 の図版にまとめ, 従来不備であった胸壁全体の血管系を確立した。

B. イヌの頸部血管系に関する研究

I 頸部筋の血管分布。頸部筋には総頸動脈と外頸動脈からおこる動脈群〔頭側甲状腺動脈 (このうちの胸鎖乳突筋枝と輪状甲状枝), 後頭動脈 (上頸枝, 中頸枝, 下頸枝, 後頭枝), 後耳介動脈 (このうちの胸鎖乳突筋枝, 耳介枝, 筋枝)], 鎖骨下動脈と腋窩動脈からおこる動脈群〔椎骨動脈 (このうちの筋枝), 肋頸動脈 (このうちの頸横動脈, 深頸動脈, 最上肋間動脈, 筋枝), 肩甲頸動脈 (このうちの胸一三角筋動脈, 筋枝, 上行頸動脈, 浅頸動脈), 肩甲回旋動脈〕が分布するが, これらの血管の起始, 走行, 個々の筋に入る血管をきめ, さらに個々の筋について血管の分布状態を Figg. 1~16 の図版にまとめ, 従来明確でなかった筋の血管分布を明らかにし, 頸部筋全体の血管系を確立した。

II 咽一喉頭部の血管分布。咽一喉頭部には頭側甲状腺動脈 (胸鎖乳突筋枝, 尾側喉頭動脈, 輪状甲状枝, 甲状腺枝, 咽頭枝), 頭側喉頭動脈, 上行咽頭動脈, 後頭動脈の下頸枝, 舌動脈の筋枝が分布するが, これらの血管の起始, 走行, 分布状態を筋との相互関係を考慮して, Figg. 1~8 の図版にまとめ, 咽一喉頭部の血管系を確立した。

論文審査の結果の要旨

イヌの精細な解剖学は家畜解剖学上からも, 比較解剖学的からも, 実験医学的見地からもきわめて重要な事項であるが, じゅうらいよるべき精細な記載が内外の文献を通じてはなはだ乏しい。著者はこれらの必要にこたえてイヌの精細な解剖学的記載を行ない, よるべき成書を完成することを目的として, まず血管系から着手したが, 本論文は多数例のイヌの血管注入標本によって胸頸部の血管分布を主として, ヒトとの対比においてこれをとらえて, これを詳細に記載し, じゅうらいの文献に記載をみなかった多くの新見をもたらしたものであるが, その主なるものを記すとつぎのごとくである。

1) 外側内胸動脈 *A. thoracica interna lateralis*, *R. costalis lateralis* はじゅうらいヒトでは異常血管として記載され, イヌではじゅうらいの解剖学成書において無視されてきたものであるが, 著者の研究ではこれはイヌでは常在の重要な血管で, 一般に肋頸動脈から起始し第一ないし第三肋間に分布することを発見した。

2) さらにこの血管と肋間動脈との関係を追究し, ヒトの最上肋間動脈は I, II 肋間動脈を分岐するが, イヌでは I 肋間動脈は深頸動脈 *A. cervicalis profunda* から起始し, II 肋間動脈は最上肋間動脈から起始し, III 肋間動脈は半数例において最上肋間動脈から, また半数例においては外側内胸動脈から起始することを見いだした。その他, 胸大動脈からの肋間動脈の起始についてのイヌにおける諸型をヒトとの対比においてとらえた。

3) その他胸壁筋, 頸部筋に分布する血管の分布状況を精細に記載し, ヒトとの対比においてこれを論じ, さらに咽頭, 喉頭血管の態度を追究した。かくしてこれらの動脈の起始, 走行, 分布状況を詳しく記

載し、これをヒトの対比によって論じ、多くの新知見をもたらし、じゅうらい不備であったイヌの血管系についての記載を完成した。

本論文は家畜解剖学上，比較解剖学上，実験医学上重要な研究であり，医学博士の学位論文として価値あるものと認定する。